

歴史よもやま話

176

白虎隊の生き残り 飯沼貞吉

和泉清

戊辰戦争(会津戦争)の悲劇と言えば、白虎隊二番隊士20人の集団自決であろう。飯盛山には今も彼らの墓石が整然と並び香煙の絶えることはない。

19隊士の墓地から少し離れて、1957年に建てられた20人の隊士、飯沼貞吉の供養塔だけが、ひそりと佇んでいる。

なぜ彼一人だけが仲間外れにされたのだろうか。それは一緒に自決したにもかかわらず「運悪く」生き残ってしまったからにほかならない。

飯沼は短刀で喉を突いた

が死にきれず、さうに突くと骨に当たった。そこで刀の柄を石に押し当て、ツツジの枝を両手でつかみ、力をふるって刃先に突つ伏し

たが喉を貫いたと思った瞬間に気を失った。

その後、我が子を探しに来た藩士の妻ハツに発見され、既に死んでいた我が子の代わりに、懸命に手

当をしてくれたお陰で一命を取り留めたのである。

その後、官軍の捕虜となるが、見守るのある若者

出陣の朝、母は自作の歌

「梓弓」向かつ矢先は繁く林の自分基地、熟した黒い

話を思い返すものです。舗装されいない砂利道、雑木

頭の中に展開する世界に一人身を置き、ち返り過去に向き合うこと

が人生の糧になるとほつての通りです。

前を見据えて何も見えず、虚構のみ言ってしまう

ただ時間が過ぎゆくに任せ

て「無の空間」に漂っている。

追憶回帰と人間50年周期で軌道を一周するらしい。

人生50年とうたわれた名残かもしれない

の直系、飯沼一元氏の著書「白虎隊士・飯沼貞吉の回生」によると、飯沼が電信技師を志したきっかけは、我が国初期の新聞に白虎隊自刃の記事があるのを見、電信による情報伝達の凄さを感じ、関心を持ったのだ

ろうと推測している。

18歳で工部省に採用され下関、小

倉、山口、東京で本橋、神戸、大阪

新潟などの電信局に勤務。通信省に移り

15歳で止壇(大学)に入っ

た。学問武芸に抜群の成績

であり、白虎隊には一歳多

くサバを読み、「16歳」偽つ

て入隊している。

彼は幾度か自畫企てたとい

う。しかし檜崎に論

多分に束縛したであろう

ことは想像に難くない。

飯沼は、どのような思い

で余生を全うしたのだろう

か。故郷を遠く離れた長州

で、たという。しかし檜崎に論

され、新しい時代を生き抜く決心をした。

名を貞吉から貞雄に改め

た。この間、日清・日露

大正2年(1913)、満

60歳で定年退官している。

またこの間、日清・日露

兩戦役に従軍。大本營付で

電信業務を務め、陸軍大尉

にまで昇進し退役した。

電信技術としての飯沼は

「弧虎」などと号して歌を詠んでいる。「弧虎」とは「退官後の飯沼は「孤舟」正しく、白虎隊から孤立して彼そのものを表していると言えよう。また彼は、白

虎隊生き残りの身を恥じて当时的話を極力避けるようにしていたという。

昭和6年(1931)2月12日、仙台で飯沼貞吉は

「弧虎」などと号して歌を詠んでいる。「弧虎」とは「退官後の飯沼は「孤舟」正しく、白虎隊から孤立して彼そのものを表していると言えよう。また彼は、白

虎隊生き残りの身を恥じて当时的話を極力避けるようにしていたという。

昭